

## ▲▼▲第47回クリエイティブサロン(2017年 1月28日)開催報告▲▼▲

### 第1部講演会：「多重知能理論から芸術思考へ」

講師：有賀三夏（東北芸術工科大学 創造性開発研究センター研究員・講師）



今回、『多重知能理論から芸術思考へ』というテーマで、皆様にアートの使い方についてお話する機会を頂きました。通常「アートの話をします」と始めると、多くの方が頭に思い浮かべるのが、美術的な、または技術的なものであるようで、「自分はその世界に疎いから・・・」とか、「小さい頃から絵を描くのは苦手な・・・」とか、または「美術館に行くのが趣味ですよ」とおっしゃってくださる方もいらっしゃいますが、私の話はそれとはちょっと違うかもしれません。多重知能理論 (Multiple Intelligences = MI) とは、ハーバード大学のHoward・ガードナー博士が提唱した理論で、人間には誰にでも8領域の知能があり、それは生活する環境や文化によって人それぞれで使い方が異なるという考え方です。MI理論は現在、世界中の教育の場、ビジネスの場で用いられていますが、私はこの理論をお借りして「芸術思考」という思考プロセスをご紹介します。頭の中に浮かび上がってきたアイデアや妄想を、アートを創り出すように現実化していくと、「その過程が楽しかったり、美しかったり未来的である」と定義しています。アートは、私たちの8領域の知能を更に強化したり、横断的に統合させたり、融合させたりする創造の「きっかけ」を作ります。この度はアートセラピーやヒーリングアート、ホスピタルアートなど、アートが創造される過程やアートに影響される環境変化の実践をいくつかご紹介させていただきました。芸術領域はともすれば理解されにくい一部の者の創作活動と思われがちですが、このような場でお話をさせていただくことにより、芸術思考の用途をご紹介することができ、今後“創造力と想像力が必要とされる創作活動”の必要性を革新できるのではないかと考えています。果然、講演終了後に沢山の先生方から未来に向けての芸術思考の活用方法をご提示していただき、アートが学際領域の繋ぎに成り得るものだと実感いたしました。

(記事：有賀三夏)

### 第2部WS：「2時間でできる創造的グループ思考：交流制約法TCoM」と、そのワークショップ「アクティブ・ラーニングが日本の教育システムに根付くには何をなすべきか」への適用

講師：阪井和男(明治大学教授) 問題提起者：小粥幹夫(日本創造学会評議員)



本ワークショップでは、交流制約法TCoM(Transactional Constraint Method)の考案者である明治大学阪井和男氏がファシリテート、評議員小粥幹夫氏が課題提起者の任務を担った。最初に収束思考セッション、ついで発散収束セッションというのが、このワークショップの特徴である。

阪井氏によるグランドルールの説明の後、小粥氏が課題発見と解決への努力の経緯を説明した。参加者は質問のみが許され、課題提起者は簡潔に答える。1時間この繰り返しで、多様な質問がランダム出るが、その整理も方向づけもしない。質疑応答を通して理解を深める形式なので、配布資料なしとした。課題提起者は思考の過程を振り返り、質問者の表情を伺いながらソフトムードで回答を楽しむ。全体としてはランダムでまとまりを欠くように見えるが、質問する個人は他の質問に惑わされることなく自分の中での思考が進み、構造化、再構築が行われている。講演会での説明は一方通行になり易いが、自分に身近な質問を軸に展開するので、インタラクティブな対話に繋がる。

後半は、24名の参加者を4名からなる6グループに分け、2段の世界・カフェを実施した。参加者は疑問を思い出しながら、気づきや意見を語りながら、テーブル中央の模造紙に書き込む。15分の自由討論の後、組み合わせを変えて自由討論を続ける。これに続いてグループ毎に3から4のキーワードを選び、その関係性について討論して発表に備えた。最後の発表内容は、教員の理解を深める研修、教員や地域など各種コミュニティの活動、評価の工夫、成功例の共有などに加えて、面白さ含めて子供の学ぶ道筋の理解、生徒が自主的に学びの内容を決めるなどの新しい視点も紹介された。特に社会との繋がりの中で主体的に学ぶ子供の支援、コミュニティとの連携について共感を得たことは心強い。生徒のシラバス立案への参画、過去の総合学習の政策展開の失敗回避法などの多様な視点を補足していただいたことは有意義であった。

(記事：国藤進)